ムゥとザジ

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ムゥとザジ

【Ｎコード】
Ｎ４７００Ｏ

【作者名】
上村忍

【あらすじ】
普通の日々の中のちょっと普通ではない出会い。
まぁ、いんじゃない、という小さな話を集めました。
ムゥという男の子とザジというぬいぐるみと吉沢春人という男のお話です。

～1～（前書き）

普通っぽいけどちょっと普通じゃないお話です。
もしよければ、お付き合いください。

～1～

冬の寒さが身に染みる。例年にない暖冬とは言っても、寒い物は寒い。

俺は、給料明細をコートのポケットの中で握りしめた。

すすきのの居酒屋にて、一ヶ月必死に働いて１２万円。

昼は弁当といったランチを行う居酒屋で、夜は１２時まで。時給は微々たるもので、働けど働けど金は一向に貯まらない。

どうしてこうなってしまったんだろう？

正月の雰囲気も、何もかも気に入らない。年が明けたからってなんてことはない、カレンダーが一枚めくれるだけだ。

新年早々、呑みに来る奴らを尻目に、久々の早番で終わった店を後にした。

いつも通りの帰り道、もう冬の日暮れはとても早く、真っ暗になった道を歩いていると、一軒のバーの看板が目がとまった。

いつもと同じなのに、なぜか今日だけ気になる。給料日だからだろ

うか。

どうせ家に帰っても、くだらない新春番組を見るだけなんだから、たまに独り呑むのもいいかも知れない。

そう思った俺は、階段を下り、バーの扉に手をかけた。

バー「ｏｎｅ　ｎｉｇｈｔ　ｍａｇｉｃ」

店内は木造の小さなカウンターに４席ほど。後は小さな丸テーブルが２つほどだった。

カウンターにはくたびれた感じの初老のバーテンがくわえタバコで新聞を読んでいる。

ここまでは流行らないバーによくありそうな風景だが、普通のバーにありえないのが、カウンターに座っている男だった。

いや、男と呼ぶよりは、「男の子」と呼んだ方がいいかも知れない。背筋をまっすぐに伸ばし、まっすぐ前を向いている。優等生が授業でも受けているような様子だった。

「いらっしゃい」

バーテンは新聞から少し目をずらし、また新聞に目を落とした。

俺は少しムッとして、カウンターの一番手前に腰掛けた。

客が座ったのにバーテンは新聞から目を離さない。隣の隣の男の子

は、こちらをちらりとも見ずに、まっすぐ前を向いたままだ。
異様な雰囲気に耐えられなくなって、俺は言葉を発した。
「メニューは？」
やっと新聞から顔を上げて、バーテンは「やれやれ」とでもいいたげに、新聞を折り畳んだ。
「メニューはないよ。客なら、何かが呑みたいんだろう？飲みたいものを教えとくれ。」
「だから、メニューが欲しいんだよ。」
「メニューに従ってしまうのは店に負けた気がせんかね？選択肢はお客であるあんたが持ってるんだ。こっちもプロだ。呑みたい物を出すよ。」
すごい自信だな。よほどの物があるんだろう。と、言ってもこっちはバーなんてあんまり言ったことがない。行くのは自分の働いている店と同じような居酒屋だけ。あんまり高い酒を頼んで、ふっかけられてもたまらない。
「…ビールで。」
無難なところで落ち着いた。
ピカピカに磨かれたグラスに、バーテンは手慣れた手つきでビールを注ぐ。思わずゴクリと喉が鳴った。

出されたビールを一息で半分ほど流し込む。言うだけあって、入れ方は完璧だった。旨い。

バーテンはまた新聞に向かっていた。無礼なバーテン。

ビールを呑みながら、やることがなくなったので店内を見回す。

壁は打ちっ放しのコンクリ、特別飾ってある物もない、殺風景なバーだ。

見ないようにもしようかと思ったが、やっぱり気になるのは、隣の隣の男の子だ。

緑のコートを襟を立て、店の中なのにニットキャップをかぶっている。

男の子の前には、カルアミルクだろうか？少し茶色の飲み物がグラスに入っていた。

じろじろ見ていると、急に男の子がこちらを向いた。

「はじめまして。」

まだ幼さの残る声はなんだか耳に残る。

「…は、はじめまして。」

思わず、どもってしまう。なんだってんだ、子ども相手に。

「僕はムゥ。これはお酒じゃないよ。お酒はまだ飲んだらダメなん

だ。」

といって、ムゥと名乗った男の子はグラスをチンっと弾いた。

「コーヒー牛乳。大好きなんだ。」

「そ、そうかい。」

また、どもってしまう。

「お兄さんの名前は？」

「え？」

「僕は自己紹介したよ。自己紹介したら、自己紹介をしなきゃならないんだよ。」

「あ、ああ。僕は春人。吉沢春人だ。」

ムゥは無表情な顔で、手を出してきた。

「握手。自己紹介をしたら握手だよ。おじいちゃんが言ってたんだ。」

変なガキだ。そう想いながら、手を握る。子どもらしい、小さな手だ。

「友達が出来たんだな。よかったじゃねーか、ムゥ。」

突然、甲高い声が聞こえた。ムゥの口は動いていない。バーテンの

声とも違う。

びっくりしていると、ムゥはカウンターの一番奥の席に手をやった。

「うん、そうだね。握手をすると友達だもんね。」

今度はムゥの口が動く。さっきの幼さの残る声だ。

カウンターの席から出てきたのは、ぬいぐるみだった。クマのぬいぐるみのようだけど、至る所がつぎはぎになっていて、痛々しい。

「春人ってったか？よろしくな、俺の名前はザジだ。クマだからって怖がるなよな。」

ムゥはぬいぐるみを抱き上げ、こちらに向けた。相変わらず、ムゥの口は動いていない。

「クマが、しゃ、しゃべった？！」

バカみたいだが、そのまんま思ったことが声に出た。どう見ても、クマがしゃべっている。

「なんだよ、感じ悪いな。クマだからしゃべったらだめだって法律でもあんのか？クマ差別だな、こいつ。愛護団体に訴えてやろうか？」

「ダメだよ。せっかくの友達にそういうこと言ったら。普通、クマはもちろん、ましてぬいぐるみはしゃべらないもんだよ。」

「あー、お前までそういう事言うのか？しゃべりたいからしゃべっ

てるんだよ。世の中のぬいぐるみなんて、みんなしゃべるんだよ。ただ、お前達人間が聞こうとしていないだけで。」

「わかったよ。ザジの言うとおりだよ。でも、春人は僕の友達だから、仲良くしてね。」

「へいへい。よろしくな、春人。」

と、言ったクマのぬいぐるみの手を取って、ムゥはこちらに差し出してきた。

思わず、そのクマの手を握る。史上初、しゃべるぬいぐるみと仲良くなった男、吉沢春人。

これが、ムゥとザジとの出会いだった。

～1～（後書き）

僕のツイッターのアイコンのお話です。もう2年くらい前に書いたお話でした。
完結はしていませんが、何話かありますので、少しずつUPしていきます。

そのうち続きも書こうと思っています。

～2～（前書き）

前回の続きです。そのまま読んでもらえるとわかりやすいかも。

～2～

３杯目のグラスが空になっても、全然酔わなかった。

それが１５才の少年と、その傍らでしゃべるクマのぬいぐるみのせいだとは認めたくなかったんだけど。

「で、大学を出て、居酒屋でたらたらバイトをしてるって訳だ。ごくろうさんなこって。」

始めはびっくりしたしゃべるクマも見慣れてきた。カウンターに腰掛けながら、したり顔でしゃべっている。もちろん、口は動いていないのだが。

「ねぇ、ザジ、こういう人の事をニートって言うんだよね？」

ニットキャップを目深にかぶっている少年は、残酷な言葉をさらりと言ってのける。しかし、目や口元は笑っていない。

バイトが終わって立ち寄ったバーで、俺はコーヒー牛乳好きな少年「ムゥ」と、その横に座るしゃべるクマのぬいぐるみ「ザジ」と出会った。

ぬいぐるみがしゃべるなんて驚きだけど、日本にいながらちょうど地球の反対側のチリの人間とも話せるくらいだから、今のこの世の中はなんでもありなんだろう。

カウンターの奥にいる店員は、俺らの会話に興味も向けず、新聞を読みふけっている。毎日→朝日→読売にまで入ったところだった。

「ニートじゃない！独り暮らしをして、自分で食っている人間をニートとは呼ばないんだよ。」

俺は、思わず大きな声で反論した。

「そうそう、こういう奴はニートじゃなくてフリーター、日本語に訳したら自由人だな。もしくは「ただの人間」か？ぎゃははは。」

つぎはぎだらけのクマが笑う。腹立つ。

「ねぇ、春人。どうして居酒屋で働いているの？居酒屋さんが好きなの？日本一の居酒屋さんになるとか？」

まっすぐな目で聞いてくるムゥ。言葉につまる。

「…大学を出ても、もう少し遊びたかったんだよ。」

「大学って、自分のやりたいことを勉強する場所じゃないの？」

「結局大学なんて、だらだらと酒呑んで、友達としゃべって、女と寝て終わりだよ。終わりのない夏休みみたいなもんだ。…終わったけどな。」

自嘲気味に笑いが出る。情けない。

「そっかぁ、春人。おめー、大学はとりあえず行っておけばいいってクチか。ってか、どこに行ってたんだ？」

「〇〇大学。」

「ぎゃはは。名前さえ書ければ受かるっていうあそこか？ずいぶんと受験勉強は熱心だったんだな！」

「大学に入って、居酒屋さんなんだ。居酒屋の勉強をしたの？」

「…特に高校出てやりたいことなかったから、とりあえず大学には行っておこうと思ってさ。大学に行ってもやりたいことなんて見つからなくて、とりあえず卒業はしたんだけどな。」

酔ってないつもりだったが、そうでもないらしい。なんだって、こんなガキに人生相談をしてるんだ。

けど、止まらない。

「卒業の時期になって、みんな就職活動だって慌てても、なんとかなるだろうって思った。卒業して、とりあえずバイトしながらやりたい事見つけようと思ったけど、なんも見つからないし、バイト止めたら生活できないし…」

ムゥはまっすぐ目を見ながら話を聞いている。何でも見透かされそうな目。なんだか、怖くなった。

「春人はそれでいいとおもったんなら、それでいいんじゃない。」

「そうだそうだ。それも自分の選んだ人生だ。ってか、しゃべるクマの俺に出会えたのは幸運だ！普通の人間ではこんなことってないからな。がんばれよ、目指せ日本一の居酒屋バイトってか～うぷぷ。」

「人ごとだとおもってんじゃねえ！」

なんだか溜まっていた物が爆発した。

「誰も教えてくれなかったんだ！勉強してればいい人生がおくれるって時代じゃないだろ。新卒逃したら就職がこんなにも厳しいって知らなかったし。何かしなきゃ、何かやりたいって思っても、何を！どうしていいか！わからないんだよ！誰が、教えてくれんだよ！」

残っていたビールを飲み干し、グラスをカウンターに置く。乱暴に置いたせいで、ゴツッと音がした。

ムゥは、まだまっすぐにこっちを見ている。

表情に変化はない。

俺は、その目を見るのが怖くて、バーテンに声をかけた。

ちょっとは慰めてくれるかも、なんて思った事がばれてしまいそうで。

「マスター、おあいそしてくれ。いくらだ？」

店員は新聞から、顔を上げて言った。

「１５００円」

俺は、財布から千円札を２枚出してカウンターに置いた。

「つりはいらね。」

席を立って、帰ろうとする。やっぱりムゥの方を向けない。なんだってんだ、悪い事なんてしてないのに。

「ねぇ、春人。」

背中越しに声がかかる。

「どうして人のせいにするの？人のせいにしちゃいけないって、おじいちゃんが言ってたよ。」

振り返れない。

「春人が選んだんだよ。春人が決めたんだよ。」

ドアに手をかける。

「だっせー野郎だな。人間のくせに。」

ドアを開ける。何も言い返せない。

「…かっこいいよ。日本一の居酒屋の店員って。」

ドアを閉める。階段を駆け上ると、そこはいつもと同じススキノの風景だった。

北の歓楽街。新年早々、呼び込みや客引きがうろうろしている。酔っぱらい達は、次に行く店を物色している。

華やかな街の一角で、ポケットに手を入れて上を見る。

空から降る雪は、下から見上げると美しくもなんともない。ホコリが落ちてきているみたいだ。

帰り道、ムゥの言った言葉が耳から離れない。

「どうして人のせいにするの？」

…だって、やりたいことなんて見つからないんだよ。

…日本一の居酒屋の店員ってなんだよ。ただのバイトだっての。

…どうすりゃいいんだよ。

翌日、バイト先に３０分早く着いた。昨日のムゥの言葉が気になっていて、なんだか働いた方がいい気になったのかも知れない。

とりあえず早いけど、制服に着替えてみる。

暇だ…

とりあえずふきんを持って、そこら辺を拭いてみる。

毎日掃除をしているとは言え、そこかしこにホコリがたまっているようだ。みるみるふきんは真っ黒になった。

「店長ー、新しいふきんもらっていいすか？」

ナメック星人に似た店長が答えた。

「…お前、時間前に来て、何やってんだ？何か悪いもんでも食ったのか？」

真新しいふきんをもらいながら、答える。

「いや…日本一の店員になってみようかなー、なんて。」

ナメック星人は、目を丸くして、その後爆笑していた。

ま、こんなもんか。

でも、悪くないかもな。

半年後、ナメック星人が独立して店を出すと言ってきた。聞けば、ナメック星人はけっこう有名な資産家の息子だったらしく、身分を隠して武者修行をしていたらしい。

ある程度、しっかりと力をつけたナメック星人は、親の経済力を最

大限に生かし、札幌の白金「円山」に店を構えることになった。

その独立の時に引っ張られ（あの時の一言がきっかけになったたのかどうかは知らないが）、正社員としてナメックの元で本格的に働く事になった。ナメックは金に糸目をつけず、日本各地の名店からカリスマシェフ、カリスマ店員達を集めて店を開いた。

あれよあれよと言ううちに、ナメックの店は有名になり、カリスマ達の中でもまれた俺も、なんだかんだで店員としての実力もつき、安定した暮らしにたどり着いた。

あのバー「ｏｎｅ　ｎａｉｇｈｔ　ｍａｇｉｃ」はあの後、すぐに閉まってしまった。あれ以来、ムゥとザジには会ってない。

人生、何がどうなるかわからないもんだ。

ただ、考える時がある。

俺は、自分の力で道を切り開いたのだろうか？

あの時のムゥの言葉のおかげで。

結局また、人を頼りにして流されているだけなのだろうか？

人生ってのは運なのか？しゃべるクマに出会えた俺は、ラッキーだっただけなのかな？

そんな事を想いながら、店の控え室の掃除をする。店内だけではなく、今では裏口から控え室まで掃除をするのがくせになってしまっ

た。

控え室にあったテレビではワイドショーがやっていた。

ロッカーを拭いたふきんはやっぱり真っ黒になっている。

ごしごし。

「…それでは次のニュースです。天才腹話術士、小谷夢羽（１１）、凱旋帰国です。」

ごしごし。

「…パリ、ラスベガス、その他世界各地で公演を行ってきた小谷夢羽くんはこの夏、日本公演を行うことが決定しました。」

ごしごし。

「…相棒のクマのぬいぐるみと一緒に、トレードマークのニットキャップと緑のコート…」

…ぶんっ、びたん！

俺は、ふきんをテレビに投げつけた。

信じれば、クマがしゃべるように。

信じれば、道も切り開けるのかもしれない。

～2～（後書き）

ここまでを1話目にした方がよかったように思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4700o/

ムゥとザジ

2010年10月29日12時06分発行